

明治期神戸のピアノ演奏

塩津 洋子

Piano Performances in Meiji-Era Kobe

Yohko SHIOTSU

This study was carried out as part of a joint research project concerning the history of the piano's adoption in Japan. A chronological record of piano performances based on such sources as contemporary newspaper and magazine articles as well as recital programs has already been published in "A Chronology of Piano Performances in Meiji-era Kobe." The present study analyses that record to identify specific circumstances of those performances, including performers and compositions.

はじめに

本研究は、日本のピアノ受容史について共同研究を進めているプロジェクト[1]の一環として行ったものである。同プロジェクトは、日本人として最初に世界的名声を得たピアニスト小倉末子[2]に着目し、その生涯と活動を軸に、関係する様々な事象をメンバーが分担研究することにより、日本でのピアノ受容の実態を明らかにすることを目的としている。

本稿では、小倉が幼少期から神戸女学院を卒業後東京音楽学校に入学するために神戸を離れるまでの20年弱を過ごした、明治期の神戸のピアノ演奏について考察する。

小倉は1891(M24)年、旧大垣藩士小倉周一の三女として岐阜県大垣市に生まれるが、1894(M27)年頃より神戸の兄夫婦の許で育てられる。神戸は外国人居留地を擁する港町で、欧米を始めとした外国との接触が特に濃厚な場所である。そこで兄庄太郎は花筵を扱う貿易商を営み、裕福であった。母親代わりとなった兄嫁マリアはベルリン出身のドイツ人で、幼稚園時代からピアノに関心を示した小倉に手ほどきをした人物である。8歳になった小倉はタレー Miss Elizabeth Torrey について、本格的なピアノの指導を受けるようになる。タレーはアメリカの基督教宣教師によって1875(M8)年開校した神戸女学院の教師であった。高等小学校を卒業後は同院に入学、ピアノ演奏で頭角をあらわすようになる。1911(M44)年20歳になった小倉は、東京音楽学校に入学したものの半年で退学し、ドイツに渡りベルリン王立音楽院で学ぶこととなる。以降、アメリカ滞在を経て帰国後は東京を本拠として、第一級のピアニストとして活躍する[3]。

このように、小倉は成人するまでの期間を神戸で過ごした訳で、神戸の町やそこに住む人たちが彼女の才能を育む土壌となったことは明らかである。小倉が実際に住んでいたのは、1894(M27)年頃より 1911(M44)年の間であるが、ここでは明治期全般を対象として、神戸でのピアノ演奏の実態を考察していきたい。

明治期神戸のピアノ演奏については、当時の新聞・雑誌記事、演奏会プログラム等を調査し、ピアノ演奏に関する情報を年代順に配列したものを「明治期神戸のピアノ演奏記録」[4]としてすでに公表している。今回はその記録を分析することによって、演奏者、演奏曲、等の具体的な状況を検証する。なお、本稿で扱うピアノ演奏は独奏および連弾で、伴奏やアンサンブルでのピアノは対象としていない。また、家庭内等の私的な演奏は含まれない。

公開演奏の始まり

神戸を特徴づける要素として一番大きなものは居留地の存在であろう。居留地とは商売・貿易を行うため一定の境界を設けて、条約を結んだ国の国民に居住、営業することを認めた地域[5]で、神戸外国人居留地は 1868(慶応 3)年の神戸開港に合わせ設置された。1858(安政 5)年に締結された日米修好通商条約の中では、兵庫開港がうたわれていたが、実際には兵庫の東に隣接する神戸が開港場に選ばれたのである。居留地は 126 区画に整備され、イギリス、ドイツ、オランダ、アメリカ、フランス、イタリアの各国人が居住することとなった[6]。設置後数年の頃、居住欧米人は 200 人程度であったが、小倉が神戸で暮らすようになった 1894~95(M27~28)年頃には、約 2000 人を数えるようになっていた[7]。

さて、その居留地では早い時期からピアノの公開演奏が行われていた。というのも、長崎、神戸、横浜といった日本の外国人居留地は欧米の芸能グループの巡業ルートになっていたからである。それらは劇団やオペラ団であったり、数人の演奏グループであったりさまざまである[8]。彼らはアジア各地を巡りながら極東の日本に至り、横浜や神戸などでの公演を終えると、逆ルートを辿って帰途に着くという活動をしていた[9]。

神戸が開港した 1868 年 11 月に訪れた劇団マーシュー一座が最初の芸能グループで、居留地内の社交場ユニオン・クラブで公演した[10]。音楽は米国軍艦乗組みの黒人楽団が担当したようだが、その折にピアノを使用したかどうかは不明である。ピアノ演奏が確認できる最初は、1871 年 5 月 8 日[11]、ユーリカー座 Eureka Variety Troupe が体育館 Gymnasium [12]で行った公演である[13]。メンバーは 4 人で、その中のピアニスト兼歌手 Alfred Singer がピアノを独奏した。曲は“Selection(Tancredi)”となっており、ロッシーニ G.Rossini 作曲のオペラ「タンクレディ」からの抜粋曲をピアノに編曲したものと推察される[14]。これが内外人を問わず神戸でのピアノ演奏の最初といえる。Singer は翌年には別のメンバーと共に再度来神し、2 回の公演を行っているが、ピアノ独奏はなかった[15]。

同じく 1871 年 9 月 1 日には、クラブ・ユニオンでヴェーバー C.M.v.Weber の「舞踏への勧誘」“Piano Solo, Weber’s ‘Invitation to Dance’ ” が演奏された[16]。クラブ・ユニオンは居留地設置の年に早くも結成された在住ドイツ人の社交クラブで、そのメンバー “the Members of the Lieder-Tafel” による音楽会である。シューベルト F.Schubert の歌曲などに混じって演奏された「舞踏への勧誘」は、いかにもアマチュア・ピアニストが弾きそうな、技術的に易しい曲であった。居留地ではしばしば在日外国人による演奏が行われたが、彼らはもちろん職業的な演奏家ではなく、趣味として音楽をたしなんでいる人たちであった。

上述のように来日・在日西洋人による最初の例は共に 1871(M4) 年であったが、では日本人による最初はどうか。その登場はかなり遅れて、それから 20 年後のことになる。1891(M24) 年 2 月 7 日、神戸青年会への寄付金を募る目的の慈善音楽会が神戸市医会堂で開催された。“洋琴(シューマン睡眠歌。ラビッツレー軍楽踏舞の曲) 増田つる子雨夜ひさ子” という記載があり、神戸での日本人による初ピアノ演奏ということが出来る。これは、シューマン R.Schumann 作曲のピアノ曲「アルバム綴り Albumblätter op.124-16 子守歌 Schlummerlied 」と、「ダヴィッド同盟舞曲集 Die Davidsbündlertänze op.6 」が演奏されたものと思われる。ただし、ダヴィッド同盟舞曲集は 18 の小曲で構成されているので、全曲ではなく、その内の 1 曲あるいは数曲を演奏したのではないかと思う。演奏者増田つる子、雨夜ひさ子は共に神戸女学院初期の卒業生[17]で、当時は同院の教師であった。

以上から分かるように、神戸外国人居留地でのピアノ演奏は 1871(M4) 年に始まっている。開港して外国人を受け入れることとなってたった 4 年という極めて早い時期からピアノ演奏が公開されていたわけである。しかし、これは外国からの巡業グループであったり、在日の西洋人による演奏であったので、居留地のある神戸という場所柄を考えれば当然のこととも言えるだろう。一方で、日本人によるピアノ演奏は 20 年遅れての登場となる。この事実は、開港した当時はピアノというものをまったく知らなかった日本人が、楽器を認識し、西洋人の演奏に触れ、自らも演奏を習得する、といったプロセスを踏んでいくためには、20 年つまり 1 世代分くらいの年月が必要であったことが示している。日本人最初の演奏者はミッション・スクールを卒業し、母校の教師となった女性で、ミッション・スクールという西洋人との接触が多く、したがって西洋音楽に親しむ機会の多い環境にあった者である。

演奏者

明治期神戸でピアノ公開演奏を行った人物は以下の通りである。基本的な立場の違いから、来日西洋人、在日西洋人、日本人、の 3 グループに分けた。また、どのような人がピアノ演奏に携わったのかを具体的に知るため、各人物について簡単なプロフィールを判る範囲で挙げた。

各グループごとに公演年代の早い順。名前の表記は出典資料に従う。

複数の表記がある場合は、外国人は原綴りを優先し、カタカナだけの外国人および日本人は筆者の判断でひとつを選んだ。

プロフィール部分(：の右側)に挙げた原綴りは二次資料より確認したもの。注記には各人のピアノ演奏が確認できる一次資料の内、年代の早いものを 2 件まで挙げた。演奏の詳細については、既発表の「明治期神戸のピアノ演奏記録」[4]を参照。

【来日西洋人】

Mr.Alfred Singer： ピアニスト、バリトン歌手。[18]

Maestro Th.(Ch.)Hirlemann： ピアニスト、作曲家。自作曲も演奏。歌手の夫人と来日。
[19]

Mr.I.C.H.Iburg： ヴァイオリニスト。[20]

Mr.Vela： 指揮者、ヴァイオリニスト。 The Royal Italian Opera Company というグループとして公演。[21]

Miss Marie Carandini： ソプラノ歌手、ピアニスト。[22]

Miss Marion Linden： メッツォ・ソプラノ歌手、ピアニスト。[22]

Professor Haselmayer： Professor という称号は具体的には不明。ピアノの曲弾きのようなこともしたらしい。手品師という情報もある。[23]

Maestro Meneses： 自作ピアノ曲も演奏。[24]

Mr.Isidore Luckstone： ピアニスト。ハンガリーの著名ヴァイオリニスト、レメーニ
Eduard Remenyi と共に来日。[25]

ドウレー： フランスの演劇団の一員。[26]

コンツキー： ドイツ宮廷の著名ピアニスト Chevelier de Kontski。[27]

Mr.Donnenberg： Elsie Adair の演劇グループの一員。[28]

オルガ・クルスチエフ： “有名なるピアノ家” と紹介されている。[29]

マキー嬢： アメリカの“ピアノ名手”。[30]

ボナヴィヤ・ハント： イギリスのピアニスト。[31]

アルベルト・フリーデンタール： ドイツまたはオーストリアのピアニスト。[32]

ハインリッヒ・コーレル： ドイツ人。ロンドン音楽学校教授。[33]

ウンチャコワ嬢： ロシアの女学生。[34]

H.コーラー： ドイツ人。[35]

エルジー夫人： ウィザース音楽団のメンバー。[36]

ラフワルヴスキー： ポーランドのピアニスト。左手演奏の特技あり。[37]

ベーパー： イギリスの音楽家。フォノ・フィドルも演奏する。[38]

ベアー： イギリスのピアニスト。[39]

【在日西洋人】[97]

Mrs.Vigot： K.R.& A.C.[40]のメンバー。

Mrs.Schliter： 同上

Mr.Freese： 同上

G.Sauvlet： ギヨーム・ソーヴレー。神戸での初演奏は 1885(M18)年で、上海より来日。
その後、横浜に居住したらしい。1886(M19)年より音楽取調掛に雇用される。
[41]

ベター女： Miss Anna M. Vetter 神戸女学院教師。[42]

ドラ・リース： 神戸女学院教師？[43]

Soroban： Professor という称号で紹介されている。K.R.& A.C.のメンバー？[44]

F.Elbmig： 同上。 B.Elbmig という表記もある。[44]

ハウ嬢： 米国人。Miss Annie L.Howe 神戸女学院教師。[45]

スキナー夫人： 英国人。[46]

アッキンソン嬢： Miss J.Atkinson 米国人。神戸女学院教師の Mr.John L.Atkinson の
娘？[46]

ペネ嬢： Miss Penney 米国人？[46]

Mrs.Lightfoot： The Kobe Social Circle のメンバー。[47]

Miss Nankivell： 同上。[47]

Miss Poole： 東京音楽学校教師 August Junker のグループとして演奏。プール学院関係
者？[48]

E.H.サマス夫人： 神戸在住。[49]

G.フィースト夫人： 神戸在住。英国人。夫はアマチュア声楽家。[49]

S.デール嬢： ドイツ人。[50]

ソーター嬢： 神戸在住。[51]

ワッシーフ夫人： 露国領事夫人。[52]

ドーマン嬢： 神戸在住？[53]

ウィッチャー夫人： 神戸在住？[54]

アルベル・クラーク嬢： 神戸在住？[55]

デフォレスト： Miss Ch.B.Deforest 日本生まれ。1905(M38)年より神戸女学院教師。
1915(T4)年より神戸女学院院長。[56]

タレー嬢： Miss Elizabeth Torrey 1896～1909(M29～42)神戸女学院教師。[56]

ウエンライト夫人： 同志社女学校教師の Mary E.Wainwright と同人？[57]

デビニツシユ嬢： 神戸在住？ [58]

スチブンス嬢： 神戸在住？ [58]

ブカナン夫人： 神戸在住？ [59]

スタンフオド夫人： Mrs.A.W.Stanford 1900～1903 (M33～36) 神戸女学院教師。M20
年代には同志社女学校教師。[60]

Hermann Heydrich： ドイツ人。1902～1909 (M35～42) 年東京音楽学校教師。 [61]

ランベル・ハーグリープエ： 神戸在住。フランス人[62]

ギシン夫人： 神戸在住。[62]

ガペー： Miss Florence B.Guppy 神戸女学院教師。[63]

カープ： ？ [64]

キャサリン・Thamson： 神戸女学院教師。[65]

【日本人】

増田つる： 1884(M17) 年神戸女学院卒業。1886～1891 (M19～24) 年神戸女学院教師。
1891～1900 (M24～33) 年梅花女学校教師。[66]

雨夜ひさ： 1884(M17) 年神戸女学院卒業。同志社女学校教師を経て、1888～1891(M21
～24) 年神戸女学院教師。[66]

長田花： 神戸女学院教師 J.T.Gulick の養女。神戸女学院から梅花女学校に移り卒業。頌
栄保母伝習所教師。神戸女学院教師。[67]

鎌原政子： 神戸女学院卒業。1896～1909 (M29～42) 年神戸女学院教師。[68]

前田久八： 1895(M28) 年東京音楽学校卒業。東京音楽学校研究生。「洋楽手引」著。[69]

岡野貞一： 1900(M33) 年東京音楽学校卒業。1924(T13) 年同校教授。作曲家。[69]

小倉末子： 1910(M43) 年神戸女学院卒業。東京音楽学校を経てドイツ留学。[70]

安福ちえ子： 神戸女学院生徒。[71]

一柳まき子： 満喜子 1908(M41) 神戸女学院卒業。建築家 William Merrill Vories 夫人。
[71]

米野鹿之助： 1896(M29) 東京音楽学校卒業。兵庫県御影師範学校教師。[72]

大橋純二郎： M30 年代神戸で音楽教師。1905(M38) 年より大阪の市岡中学校の教師。ヴ
ァイオリンを指導。[73]

滝川英一： 1905(M38) 年東京音楽学校卒業。“関西屈指のピアニスト”と言われた。[74]

森本ぬい子： 神戸女学院生徒。[75]

松井あい子： 神戸女学院生徒。[75]

永井幸次： 1896(M29) 年東京音楽学校卒業。1906(M39) 年大阪府清水谷高等女学校教師。
1915(T4) 大阪音楽学校設立。[76]

田中銀之助： 1905(M38) 年東京音楽学校卒業。1906(M39) 年兵庫県立神戸高等女学校教

師。[76]
小林又七郎： ？ [76]
久保島裕： ？ [76]
出口昇： ？ [76]
九島和三郎： 東京音楽学校卒業。神戸市中宮高等小学校教師。ピアノが得意。[77]
坂愛子： 兵庫県立第一高等女学校卒業？ [78]
栗原欣子： 東京音楽学校卒業。相愛高等女学校教師。[79]
小松耕輔： 東京音楽学校卒業。作曲・評論家。[80]
澤田柳吉： 東京音楽学校卒業。ショパン演奏の先駆的存在。[80]
門田嬢： 神戸中宮（高等）小学校生徒？ [81]
杉原光野子： 親和女学校生徒。[82]
有井しづ子： 親和女学校生徒。[82]
田中玉吉： 音楽教師？ [83]
山下千喬： 音楽教師？ [83]
川本嬢： 神戸中宮小学校高等科生徒。[84]
松村： 神戸中宮小学校職員（教員？）。[84]
上村嬢： 兵庫県立高等女学校生徒。[85]
伊達嬢： 兵庫県立高等女学校生徒。[85]
林ふみ： 親和女学校生徒。[86]
三松あや： 親和女学校生徒。[86]
服部驎郎次： 1912(M45)年東京音楽学校卒業。[87]
貫名美名彦： 1910(M43)年東京音楽学校卒業。東京音楽学校教師。[87]
曾金全： 親和女学校生徒。[88]
喜多川純子：^{すみこ}神戸女学院教師？ [89]
大神ゆみ子： 親和女学校生徒。[90]

以上が明治期神戸でピアノの公開演奏をした人物である。来日西洋人 23 人、在日西洋人 36 人、日本人 40 人、計 99 人が確認できる。演奏曲の延べ数では、来日西洋人が 65 曲、在日西洋人が 98 曲、日本人が 133 曲である。来日および在日の西洋人を合わせると、59 人延べ 163 曲で、日本人の 40 人延べ 133 曲を上回っている。やはり明治期神戸のピアノ演奏は、西洋人によって担われている割合が大きいことがわかる。しかし、日本人のピアノ演奏も西洋人に比べ、人数で 6 : 4、曲数で 5.5 : 4.5 という割合なので、ひどく差がある訳ではない。この状況は西洋人の演奏に刺激を受けた日本人が、ピアノという未知の楽器を積極的に習得しようとした結果とみることができる。

さて、グループごとの演奏者のプロフィールを観察すると、来日西洋人のグループでは兼業的な演奏者が目立つ。バリトン歌手でありピアニストであるとか、ヴァイオリニスト

と紹介していながらピアノ独奏も披露するといった形である。特に明治 20 年以前に来日した巡業グループに多い。これらのグループにとっては少人数で多くの演目を提供できることが有利であるため、一人で何役もこなせる芸達者なメンバーでグループを構成する傾向があったと考えられる。したがって演奏の質については必ずしも高いとはいいがたいであろう。明治中・後期になるとピアニストとして専門性の高い演奏者が増えてくる。

在日西洋人のグループでは、教師が目立つ。36 人中 11 人が教師で、その内 9 人は神戸女学院の教師である。したがって在日西洋人のピアノ演奏については、神戸女学院の教師が大きく関わっていたことがわかる。教師以外の人たちとしては、居留地のスポーツ・クラブ K.R.& A.C.(Kobe Regatta & Athletic Club)や、社交団体 The Kobe Social Circle などの団体に所属している人やその家族などが見られる。その他、具体的なプロフィールの不明な在日西洋人たちは、居留地の貿易商などの関係者である可能性が高い。

最後のグループ、日本人については教師・生徒といった学校関係者が 40 人中 30 人と、8 割弱を占めていることに注目したい。さらにその中で、神戸女学院と東京音楽学校という 2 つの学校に集中が見られる。前者が 10 人、後者が 12 人である。当時の日本人によるピアノ演奏は学校という場を中心に展開していたといえることができる。

演奏曲

明治期神戸で演奏されたピアノ曲にはどのような傾向があるのだろうか。演奏は延べ数で 296 曲確認できたが、その内演奏曲がほぼ特定できるのは 132 曲である。全体に対する割合は 45%になる。“ほぼ特定”としたのは資料中の記載が“ワルツ ショパン作曲”のような表記になっており、具体的にどのワルツかまでは特定できないような例が含まれるためである。さらに、作曲者名は明記されていないが、曲名などから作曲者を推定したものも若干含まれる。この 132 曲について作曲者別延べ演奏曲数を出してみた。しかし 5 割以上がどんな曲を演奏したかわからない上に、対象となる数値が小さいのでその有効性には不安があるが、とりあえず次のような結果を得た。全体及び各グループ別に、延べ 3 曲以上演奏された作曲者を挙げた。

【明治期神戸で演奏されたピアノ曲 全体】 [132 曲中]

Chopin,F. 15 曲

Weber,C.M.v. 11 曲

Saublet,G. 10 曲

Mendelssohn,F. 9 曲

Rubinshtein,A.G. 7 曲

Liszt,F. 6 曲

Beethoven,L.v. 5 曲

Rossini,G. 5 曲
Brahms,J. 4 曲
Thalberg,S. 4 曲
Paderewski,I.J. 4 曲
Schumann,R. 3 曲
[91]

【内訳】 来日西洋人[45 曲中]

Liszt,F. 6 曲
Chopin,F. 5 曲
Rubinshtein,A.G. 4 曲
Paderewski,I.J. 3 曲
Rossini,G. 3 曲
[91]

在日西洋人[64 曲中]

Sauvlet,G. 10 曲
Chopin,F. 7 曲
Weber,C.M.v. 6 曲
Mendelssohn,F. 4 曲
Thalberg,S. 4 曲
Rubinshtein,A.G. 3 曲
Brahms,J. 3 曲

日本人[23 曲中]

Mendessohn,F. 5 曲
Beethoven,L.v. 5 曲
Weber,C.M.v. 4 曲
Chopin,F. 3 曲

以上のように曲数が少ないため、小さな要因が順位に大きく作用する場合がある。たとえば全体の 3 位、在日西洋人で 1 位となっているソーヴレーは、大作曲家たちが並ぶ中で少し違和感のある存在である。彼は、1886(M19)年より 1888(M21)年まで音楽取調掛のいわゆる“お雇い外国人”としてピアノ、唱歌、和声など西洋音楽全般を指導した人物である[92]。1885(M18)年に 2 回、1887(M20)年に 1 回神戸で演奏会を開き、その際に自作品

数曲を演奏したことにより、上位に挙げられている。このようにちょっとしたことが順位を左右するので、細かい分析は意味を成さないと思うが、全体および各グループの集計を概観すると、ショパンがいずれのグループにも登場していることが見てとれる。つまり、ショパンは明治期という洋楽受容初期から日本人・西洋人の区別なく多く演奏されていたことが分かる。実は集計に含まれていないが、小倉末子が 1903(M36)年に“Scherzo”を、1905(M38)年に“エチュード”[93]を演奏している。この 2 曲とも作曲者名が記載されていないため、曲を特定することができないのだが、ショパンの作品である可能性もあるだろう。もし、この 2 曲の内どちらかでもショパンの曲であったら、小倉末子は神戸で最初にショパンを弾いた日本人ということになる。その点は不明のままであるが、明治期神戸で一番多く演奏されたピアノ曲がショパンの作品であったことが確認できた。筆者は「クラシック演奏会での選曲傾向」と題して、1984(S59)年および 2004(H16)年に関西[94]で開催されたクラシック演奏会で取り上げられた曲の集計・分析を行ったことがある[95]。ショパンは両年ともにピアノ独奏の領域で最上位にランクされた。そもそもこの調査は 20 年の時間差による選曲傾向の変化を知ろうとしたものであったが、ショパンに関しては、不動のものであることを証明することとなった。したがって今回の明治期の調査と併せれば、ピアノ演奏においては受容の最初期から現代に至るまで、変わらずショパンが多く取り上げられている状況が浮かび上がってくる。

前述のように、全体に数値が小さいので細かい点には言及する意味が持てない訳だが、ショパンの他には、リスト、メンデルスゾーン、ベートーヴェンに少し着目してみたい。リストは、来日西洋人のグループのみに登場する。彼らは、技量の差はあったようだが一応職業音楽家として来日公演した人たちであるので、リストのような技巧的な作品もレパートリーにしていたのであろう。一方、ベートーヴェンは日本人グループのみに見られる。来日および在日の西洋人の演奏例はまったく無い。これは、日本人のピアノ演奏者にドイツ音楽を主流としていた東京音楽学校関係者が多いことと関係があるのではないだろうか。メンデルスゾーンは在日西洋人と日本人のグループに見られる。具体的には「無言歌集 *Lieder ohne Worte*」の中の“ゴンドラの歌 *Venezianisches Gondellied*”“狩人の歌 *Jägerlied*”などである。これらは現代ではいかにも素人のピアノ愛好家のレパートリーという印象の曲であるが、東京音楽学校を卒業したいわば専門家といわれる人たちが演奏会で弾いている点に明治という時代性が感じられる。また、これらの曲がしばしば取り上げられた背景には、“ゴンドラの歌”といった標題のついた曲であることが関係していると思う。そもそも日本の音楽はほとんどが歌や語りといった言葉を伴うため、日本人は音楽を具体的な描写として捉える習慣があり、西洋音楽に接するようになっても表題のある情景描写的な曲を好む傾向が強く見られたのである[96]。技術的に易しく、エキゾチックな標題を持つこれらは当時の状況にぴったりの曲であったようだ。

結び

本稿は、2011 年発表の「明治期神戸のピアノ演奏記録」[4]を、公開演奏の始まり、演奏者、演奏曲、の 3 項目について考察したものである。その結果、大きく 2 つの点を確認することができた。まず神戸での公開演奏は、神戸開港後僅か 4 年の 1871(M4)年に始まっている。それは、西洋人によるアジア巡業グループの公演であった。また、在日西洋人による演奏も同年に行われている。以降日本人の演奏が始まる 1891(M24)年までの約 20 年間はもっぱら西洋人によるピアノ演奏の時期であった。それらは居留地という外国人社会の中で行われていたが、日本人に無関係であったわけではない。居留地での演奏会等には日本人も参加することができたからである。神戸の日本人たちは、西洋人のピアノ演奏に接しその音楽や楽器への認識を高めていったに違いない。このような展開が見られたのは、神戸に外国人居留地が置かれていたことによるものである。居留地の存在、これが第 1 の点である。ちなみに京都でのピアノ公開演奏の最初は在日西洋人によって、1890(M23)年に行われている[98]。これは神戸に比べて約 20 年もの開きがある。神戸でのピアノ演奏が他の地域に比べて非常に早くから行われていたのは、やはり居留地を擁していることに起因することがこのことから明白である。

第 2 点は、神戸女学院と東京音楽学校の存在である。在日西洋人によるピアノ演奏では、36 人中 11 人が教師でその内 9 人が神戸女学院の教師である。残る 2 人は東京音楽学校の教師である。さらに、日本人でピアノ演奏をした 40 人の内、10 人が神戸女学院の教師、生徒、卒業生等の関係者であり、12 人が東京音楽学校の関係者である。神戸開港後 8 年という早い時期に開学した神戸女学院は、当初より音楽教育に力を入れており、1894(M27)には“音楽館”を建築している。これは 1890(M23)年建築の東京音楽学校奏楽堂に次ぐ、全国で 2 番目に古い西洋音楽専用の建物で、同院の音楽教育への意欲の表われと見る事ができよう。東京音楽学校がピアノに限らず日本の洋楽受容全般を牽引していたことは言うまでもないが、神戸女学院も日本人への洋楽指導に大きく貢献していたのである。神戸での日本人のピアノ演奏者の中で、神戸女学院と東京音楽学校の関係者が大きな割合を占めていたことは、その証左と考えられる。

演奏曲については、現代でも演奏頻度で最上位にランクされるショパンがやはり上位に位置している点に興味深い。逆に現代のコンサートではあまり取り上げられないメンデルスゾーンが上位に登場している点は、明治期らしい特徴と言えるだろう。在日西洋人のグループでは素人の音楽愛好家が多く含まれていたため、技術的に易しい家庭音楽的なメンデルスゾーンの曲が好まれたと推察できる。日本人グループでは、前述の要素に加えて標題付きであることも関係しているだろう。ただし、来日西洋人のグループではメンデルスゾーンは 1 曲も演奏例がない。

明治期神戸でのピアノ演奏は、西洋人が多く関わりながらも、日本人の演奏も着実に進歩している状況がうかがえる。本稿で指摘した点は、常識的に推測できる範囲のものも含まれるが、演奏記録による調査結果を踏まえ、改めて確認できたことに意味があると考え

ている。さらに、今回の指摘については、本研究に続いて進めている京都および大阪でのピアノ演奏に関する調査結果と合わせ、神戸独自の傾向であるのか、他地域にも共通するものであるのか等、考察の精度を高めたいと考えている。

【注】

- 1 研究課題名：「ピアニスト」の誕生を考える：明治末期から昭和初期の本邦洋琴家事情の解明
- 2 1891(M24)年生～1944(S19)没。
- 3 津上智実・橋本久美子・大角欣矢 2011 『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』 東京芸術大学出版会 に詳しい。
- 4 塩津洋子 2011 「明治期神戸のピアノ演奏記録」 大阪音楽大学音楽博物館 『音楽研究 大阪音楽大学音楽博物館年報』 第 26 巻
- 5 神戸外国人居留地研究会(編) 1999 『居留地の窓から 世界・アジアの中の近代神戸』 p.5
- 6 神木哲男・他(編著) 1993 『神戸居留地の 3/4 世紀』 p.36
- 7 同上 p.195
- 8 複数のメンバーから成るグループがほとんどだが、まれに単独の場合もある。
- 9 升本匡彦 1996 「西洋芸能のアジア巡業ネットワーク」 p.57-61 『異文化交流と近代化 京都国際セミナー1996』
- 10 堀博・小出石史郎(訳) 1980 『ジャパン・クロニクル紙ジュビリーナンバー 神戸外国人居留地』 p.138 升本匡彦 1986 『横浜ゲーテ座 明治・大正の西洋劇場 第二版』 p.207
- 11 和暦では明治 4 年 3 月 19 日
- 12 1870(M3)年設立の The Kobe Regatta & Athletic Club 所属の体育館兼用の劇場。この公演の資料では Gymnasium と書かれているが、その後移転して Gymnasium Theatre と表記することが通例となった。
- 13 The Hiogo News 1871.5.6.
- 14 19 世紀のヨーロッパはオペラがもてはやされた時代。有名オペラの抜粋が Selection として多く取り上げられた。
- 15 The Hiogo News 1872.5.11. 1872.5.18.
- 16 The Hiogo News 1871.10.14.
- 17 神戸女学院百年史編集委員会(編) 1981 『神戸女学院百年史 各論』 p.208
- 18 The Hiogo News 1871.5.6. 1871.5.10. 他
- 19 The Hiogo News 1879.10.18. 1879.10.22.
- 20 The Hiogo News 1880.7.7. 1880.7.8. 他

- 21 The Hiogo News 1881.4.21. 1881.4.22.
- 22 The Hiogo News 1881.6.13. 1881.6.15. 他
- 23 The Hiogo News 1883.5.21. 1883.6.15. 他
- 24 The Hiogo News 1885.1.22. 1885.1.26. 他
- 25 The Hiogo News 1886.7.24. 1886.7.26. 他
- 26 神戸又新日報 M21.4.18. M21.4.21.
- 27 神戸又新日報 M28.6.27. M28.6.9.
- 28 The Kobe Weekly Chronicle 1898.3.12. 神戸又新日報 M31.3.7.
- 29 大阪毎日新聞 M38.12.17. 神戸又新日報 M38.12.14. 他
- 30 神戸又新日報 M39.10.22.
- 31 神戸新聞 M40.1.14. 神戸又新日報 M40.3.11. 他
- 32 日出新聞 M40.5.15. 神戸又新日報 M40.5.13.
- 33 神戸又新日報 M42.2.14. M42.2.10. 他
- 34 神戸又新日報 M42.6.26. 大阪毎日新聞 M42.6.26. 他
- 35 神戸新聞 M42.6.25. 神戸又新日報 M42.6.25. 他
- 36 大阪朝日新聞 M42.10.11. 大阪毎日新聞 M42.10.12.
- 37 神戸又新日報 M44.3.13. M44.3.6. 他
- 38 大阪朝日新聞 M44.7.16. 神戸又新日報 M44.7.18. 他
- 39 『音楽世界』第5巻第7号 M44.7.15.
- 40 Kobe Regatta & Athletic Club 1870 年居留地に創設された外国人のスポーツクラブ。
- 41 The Hiogo News 1885.10.1. 1885.9.30. 中村理平 1993 『洋楽導入者の軌跡』p.643
- 42 『音楽雑誌』第6号 M24.2.25. 大阪朝日新聞 M24.1.28. 他
- 43 『音楽雑誌』第71号 M30.7.25. 神戸楽友会主催演奏会プログラム M45.5.18.
- 44 The Kobe Weekly Chronicle 1879.11.20.
- 45 神戸又新日報 M31.10.30. 大阪毎日新聞 M31.10.30. 他
- 46 神戸又新日報 M31.10.30. 大阪毎日新聞 M31.10.30. 神戸教育音楽会主催演奏会プログラム M32.3.11.
- 47 The Kobe Weekly Chronicle 1899.2.22.
- 48 神戸又新日報 M32.5.22. The Kobe Weekly Chronicle 1899.5.31. 他
- 49 大阪朝日新聞 M32.8.8. 大阪毎日新聞 M32.8.18. 他
- 50 大阪毎日新聞他 M34.8.4. M34.8.7. 他
- 51 大阪朝日新聞 M34.10.15. 神戸又新日報 M34.10.15. 他
- 52 神戸又新日報 M35.8.27.
- 53 神戸又新日報 M36.5.19. 大阪朝日新聞 M36.5.19. 他
- 54 神戸又新日報 M37.1.16. 大阪朝日新聞 M37.1.24.
- 55 神戸新聞 M38.11.17. M38.11.20. 他

- 56 神戸新聞 M33.12.4. 神戸女学院同窓会誌『めぐみ』第 39 号 M39.3.31.
- 57 神戸新聞 M39.2.17. 大阪朝日新聞 M39.2.17.
- 58 神戸新聞 M40.3.13.
- 59 神戸新聞 M40.4.17. 神戸又新日報 M40.4.23. 他
- 60 神戸又新日報 M41.10.23. 神戸新聞 M41.10.23. 他
- 61 神戸又新日報 M41.12.12. 大阪毎日新聞 M41.12.14. 他
- 62 音楽界第 2 巻第 3 号 M42.3.1. 神戸又新日報 M42.2.14.
- 63 神戸新聞 M44.12.10. 大阪朝日新聞 M44.12.11.
- 64 神戸又新日報 M45.2.23. 神戸新聞 M45.2.23. 他
- 65 神戸楽友会主催演奏会プログラム M45.5.18. 神戸又新日報 M45.5.17.
- 66 『音楽雑誌』第 6 号 M24.2.25. 大阪朝日新聞 M24.1.28. 他
- 67 神戸女学院同窓会誌『めぐみ』第 9 号 M27.6.26.
- 68 神戸女学院同窓会誌『めぐみ』第 11 号 M28.6.26.
- 69 神戸又新日報 M35.4.5.
- 70 神戸女学院同窓会誌『めぐみ』第 31 号 M36.6.3.
- 71 神戸女学院同窓会誌『めぐみ』第 36 号 M38.1.17.
- 72 神戸新聞 M38.4.19. M38.4.17.
- 73 神戸新聞 M38.7.29. M38.7.31. 他
- 74 神戸又新日報 M38.8.7. 神戸新聞 M38.8.7. 他
- 75 神戸女学院同窓会誌『めぐみ』第 39 号 M39.3.31. 神戸新聞 M38.12.4. 他
- 76 神戸新聞 M39.2.25. 『音楽』第 9 巻第 6 号 M39.4.2. 他
- 77 神戸新聞 M39.7.2. 関西協楽会主催演奏会プログラム M39.7.8. 他
- 78 『兵庫県立第一高等女学校』S17.1.18.
- 79 神戸新聞 M40.4.17. 神戸又新日報 M40.4.23. 他
- 80 神戸新聞 M41.7.20. 神戸又新日報 M41.7.17. 他
- 81 神戸又新日報 M41.9.17.
- 82 神戸又新日報 M42.2.26. 神戸新聞 M42.2.26.
- 83 神戸新聞 M42.3.8. 神戸又新日報 M42.3.8. 他
- 84 神戸又新日報 M42.11.8. M42.11.5.
- 85 神戸又新日報 M42.11.9.
- 86 神戸新聞 M43.2.26.
- 87 神戸新聞 M43.4.23. M43.4.26. 他
- 88 神戸又新日報 M43.5.29.
- 89 神戸新聞 M44.4.23.
- 90 神戸又新日報 M45.2.26. 神戸新聞 M45.2.26.
- 91 この他に Strauss と記載された曲が 3 曲演奏されているが、曲名から推測してもどの

Strauss か特定できなかったため、挙げていない。

- 92 東京芸術大学百年史編集委員会(編) 2003 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』 p.1562
- 93 1903(M36)年 10 月 17 日神港倶楽部での慈善音楽会、1905(M38)年 12 月 2 日神戸女学院での演奏会。
- 94 大阪府、京都府、滋賀県、奈良県、兵庫県、和歌山県。
- 95 塩津洋子 2008 「クラシック演奏会での選曲傾向 1984 年と 2004 年の比較」 大阪音楽大学音楽博物館 『音楽研究 大阪音楽大学音楽博物館年報』 第 23 巻
- 96 塩津洋子 1998 「陸軍第四師団軍楽隊の選曲傾向」 大阪音楽大学音楽研究所 『音楽研究 大阪音楽大学音楽研究所年報』 第 14 巻 p.75
- 97 資料上の記載からは確定できず、筆者の推測によるものも含まれる。
- 98 「明治期神戸のピアノ演奏記録」と同様の調査を、京都を対象に行った。この結果については、後日公表の予定である。

【参考文献】

- 神木哲男・崎山昌廣(編著) 1993 『神戸居留地の 3/4 世紀』 神戸新聞総合出版センター
倉田善弘・林淑姫(監修・他) 2008 『昭和前期音楽家総覧 『現代音楽大観』 下巻』 ゆまに書房
- 神戸外国人居留地研究会(編) 2011 『居留地の街から 近代神戸の歴史研究』 神戸新聞総合出版センター
- 神戸外国人居留地研究会(編) 1999 『居留地の窓から 世界・アジアの中の近代神戸』 ジュンク堂書店
- 神戸外国人居留地研究会(編) 2005 『神戸と居留地 多文化共生都市の原像』 神戸新聞総合出版センター
- 神戸女学院百年史編集委員会(編) 1981 『神戸女学院百年史 各論』 神戸女学院
神戸女学院百年史編集委員会(編) 1976 『神戸女学院百年史 総説』 神戸女学院
- 坂本勝比古 2001 「神戸外国人居留地の形成とその展開 異国情緒のある町並みが語るもの」 神戸外国人居留地研究会 『居留地の窓から 神戸外国人居留地研究会年報』 創刊号 p.1-23
- 塩津洋子 1998 「陸軍第四師団軍楽隊の選曲傾向」 大阪音楽大学音楽研究所 『音楽研究 大阪音楽大学音楽研究所年報』 第 14 巻 p.43-80
- 塩津洋子 2008 「クラシック演奏会での選曲傾向 1984 年と 2004 年の比較」 大阪音楽大学音楽博物館 『音楽研究 大阪音楽大学音楽博物館年報』 第 23 巻 p.115-128
- 高木應光 2006 『神戸 スポーツはじめ物語』 神戸新聞総合出版センター

- 棚田真輔・他(編・訳) 1996 『神戸居留外国人のスポーツ 50 年史』 神戸スポーツ史研究会
- 津上智実(編著) 2010 『「百年前の卒業生 小倉末子の軌跡」展 図録』 神戸女学院「小倉末子展」実行委員会
- 津上智実・橋本久美子・大角欣矢 2011 『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』 東京芸術大学出版会
- 東京藝術大学百年史編集委員会(編) 1987 『東京藝術大学百年史 東京音楽学校篇 第一卷』 音楽之友社
- 東京藝術大学百年史編集委員会(編) 2003 『東京藝術大学百年史 東京音楽学校篇 第二卷』 音楽之友社
- 堀博・小出石史郎(訳) 1980 『ジャパン・クロニクル紙ジュビリーナンバー 神戸外国人居留地』 神戸新聞出版センター
- 升本匡彦 1986 『横浜ゲーテ座 明治・大正の西洋劇場 第二版』 岩崎博物館
- 升本匡彦 2003 「神戸体育館劇場序説」 神戸外国人居留地研究会 『居留地の窓から 神戸外国人居留地研究会年報』 第 3 号 p.1-18
- 山下尚志 1998 『神戸港と神戸外国人居留地』 近代文芸社
- 弓倉恒男 2002 「創立 50 周年記念 クラブ・コンコルディアの歴史」 神戸外国人居留地研究会 『居留地の窓から 神戸外国人居留地研究会年報』 第 2 号 p.91-112